

とする。

(笠間書院、平成二十四年二月、A5判、二八二頁、本体五五〇〇円)

(皇學館大学文学部准教授)

宮本誉士著

## 『御歌所と国学者』

上 西 亘

本書は新進気鋭の近代神道思想史研究者である著者が、平成二十一年提出の博士論文「神道系御歌所歌人の基礎的研究」に大幅な加筆調整をし、内容の増補と書き下ろしの五章の論考を加えて刊行されたものである。

本書の題名の一部にもなっている「御歌所」というターム自体、戦前の業績である恒川平一『御歌所の研究』や、小泉琴三『近代短歌史 明治篇』を始めとして先行研究は殊の外尠く、未開拓の分野であった。

また、御歌所に関わる事柄として近代和歌における歌人の位置づけと両者のやりとりが思い出されよう。評者のごとく当該分野に闇い一般的な人々の理解では、「旧派」が明治三十年を境にして、「新派」の興隆に取って代わられ、以後「新派」が歌壇の潮流をリードしていったという解説が一般的な「模範解答」と考えがちではなからうか。

だが、この当時の「旧派」と「新派」を今一度公平に見

直すべきであるという学問的視点が、文学の近年の先行研究にもあることに著者は着目し、先述の二者の「御歌所」研究を承け、加えて今まで「新派」の視点から御歌所を論じた先行研究は見られたが、研究の進んでいない「旧派」から見た御歌所研究の必要性があることを著者は強く主張する。

蓋しこれは「旧派」歌人のほぼ全てが、近世の国学者の歌論・歌学を受け継ぎ、そのまま近代国学へと展開されていったことから、題名の通り御歌所と国学者との関係を神道史学・思想史学の観点から研究することによって、新しい側面から近世・近代国学者研究を御歌所や旧派の再検討とともに可能になるからである。

事実、本書は最新の近代神道史研究者の研究成果によって、より明らかとなった明治期の国学者が、日本の学問の近代化に広く貢献をしたことをまた別の視点から裏付ける論考となっていることは注目すべき点であろう。

著者が従来への御歌所の研究に加え、研究御歌所設立前後の組織・形態・人員と、明治三十三年頃を一旦の終着点として、所謂、御歌所の設立を始め、当時の関わりを論じた近代の歌人と、御歌所の性格と広く一般に歌を広めるといふ明治天皇の御配慮を念頭に置きながら詳細な分析がなされている。

本書の構成は序章、終章を含めた計十章で構成され、評者が更に大枠を設けさせて頂くとすると、大きく分けて三部に構成されると考えられる。

まず設立に関わった人物を理解するために、歌道御用掛から続く斯界の関係者の思想と生涯、とりわけ「桂園派歌人」であり国学者でもある八田知紀の研究、そして同じく「桂園派歌人」であり八田の後を承けて、御歌所設置に尽力した高崎正風の思想研究・人物研究を論じている。

そして、明治四年の歌道御用掛から皇道御用掛、文学御用掛において活躍した国学者福羽美静、近藤芳樹を中心に論じる。明治初期に設置された諸掛において中心的役割を果たした福羽と近藤の役割を資料に基づき実証的に論じ、その後明治十九年の御歌所設置、御歌所設置後の関係者の人物研究を明治三十三年まで追う。

加えて、御歌所に多大な影響を与え本書で最も傾注して論じている高崎正風が、生涯の最後を費やし設立・運営に尽力した「彰善会」と「一徳会」の活動と教育勅語との関係に着目し、御歌所とはまた視点を変え、国学者・一人物としての高崎正風の活動を紹介している。

第一章では、近世の国学者で「桂園派」と言われる一派を形成した香川景樹の系統で、幕末期の国学者である八田知紀の思想と学問を論じる。

八田は薩摩藩士で、役務の傍ら自身が専らとする歌道と神道と通じて、当時の薩摩藩士に限らず、本居門下の著名な国学者や歌人に留まらず堂上家とも交流を深めて行ったことを指摘する。

この八田の幕末期においての行動が、維新後の人脈に大きな影響を与えたことを著者は指摘する。また、学問姿勢も儒学を排斥せず換骨奪胎し自らの神道観に適用している。加えて神観念においては、「天之御中主神」を中心とした神観を有し、学統は異なるものの平田派国学者との交流もあつたことが、明治初期の「天之御中主神」に関する書物の濫觴とも関わってくることを著者は指摘している。

第二章では更に八田の学問についての詳細に迫り、八田の著作『神典疑問辨』から八田の思想を具体的に探る。幕末期の八田の「天之御中主神」を中心とした神観は、明治期になると基督教対策としての言説としても見るべきだが、あくまでも当時の時勢に鑑みて成立してものであることを考慮すべきであることを筆者は論じている。『神典疑問辨』成立頃より薩摩派の国学者の中央における活躍が始まることを示唆し、歌道御用掛としての八田の活躍、ひいては薩摩派歌人の活躍の端を發したことを述べ高崎正風の論へと導入している。

八田知紀は、高崎正風の師であることは申すまでもない

が、幕末期の薩摩における桂園派国学者の代表とも言える人物で、平田派を中心とする国学者や、公家・志士との関わりが前提にあり、明治期の文学御用掛・皇学御用掛の人脈と思想形成に影響を与えた人物であるということが著作を理解する上で念頭に置くべき事項であろう。八田の尊皇思想や生涯の学問姿勢の前提にある和歌とはまさしく神の道であり、「天之御中主神」を中心とした神観念と「格物致知」に裏付けられた儒学的知識に位置づけられた神道思想が根底にあることを著者は史料を元に実証的に検証を試みていることが窺えよう。

第三章では、八田の後をうけて薩摩派国学者として歌学に専心した高崎正風の人脈と思想について取り上げている。高崎は八田と同じく薩摩藩士であり、若年期は薩摩藩の騒動に巻き込まれ不遇であつたが、その後の維新期の国事参加において関わりを持った人々が維新後の高崎の活動に大きな影響を及ぼしたことが、そして明治初期の歌道御用掛兼命以前の高崎の動向として教育に着目し、各地で地頭として教育の振興に務めたこと、左院視察団としての洋行を取り上げている。その後、歌道御用掛を拝命し、御歌掛長を歴任することになる。特に高崎の教育に関する事歴はその後、彰善会」と「一徳会」の活動において見られる道徳の宣揚の萌芽を見ることが出来る非常に重要な指摘といえる。

第四章では薩摩派国学者と離れ、歌学御用掛の前身としての文学御用掛時代の近藤芳樹と福羽美静を検証している。近藤や福羽の生涯や略歴を依拠しつつ、薩摩派国学者が活躍する以前の、諸掛と国学者の関わりを紹介している。

この章で特に重要な点は、福羽の歌道御用掛時代の白眉として、堂上和歌全盛であった宮中和歌の歴史の画期を生み出したことであり、後に続く国学者の宮中和歌に対する姿勢を作らした点に注目すべきであろう。また、文学御用掛として期待された成果は『明治孝節録』の編纂を始め、万葉集研究者として著名であった近藤の万葉集の校訂・編纂の精華である『萬葉集註疏』や「語言部類ノ編纂」に代表されるように、まさしく近世に培った国学者の学的資産の展開を意味するものであり、歌学御用掛に編組される以前も近世以来の国学の伝統を堅持する目的として各部署が機能していたことを示唆する論考といえよう。

第五章では、現在も続く御歌会始の詠進制度とそのシステムを構築した国学者たちの活動を、実質的に推進していった大日本歌道奨励會の活動を交えて論じる。詠進制度自体は国学者下澤保躬の建白に端を発しているが、従来の歌会始の枠を広げ「官員華土族平民之無差別詠進之向採録」を実現させた明治天皇の御叡慮により、飛躍的に詠進歌数が増大し、新聞各紙に詠進歌が紹介され得るなど、和

歌と歌会始が広く人口に膾炙するものとなった陰にも、宮中歌人と地方歌人との仲を取り持つ旧派歌人の国学者が存在してこそのものであったといえよう。

第六章は高崎正風と本居豊穎の歌論を軸として、御歌所歌人の再考を試みる。

高崎については桂園派歌人として、「人の情を種として、萬づの言葉とぞなれにける」という古今和歌集序の言葉を重んじ、「人情」を歌の基として重視した言説を一貫して持っていたことが指摘される。その高崎の歌に対する姿勢が、新派に分類される与謝野鉄幹や正岡子規からの旧派歌人への権威否定という「攻撃」を一身に背負ったのが高崎であった。しかしながら、先述の通り、「古今序」と「人情」を歌の基として終生貫いた高崎の姿勢が、明治天皇の御製拝見の信頼を得たものであったことを示唆している。

豊穎については、若き日の大正天皇の国学の師として仕え、明治三十年に御歌所寄人となったのであるが、豊穎の歌は「上古」を重視する言説も見られるが、高崎の歌論と同じく「古今序」を重視する言説も見られることから、高崎の後を受ける歌人としての部分も持ち合わせていた。御歌所人員に対しても高崎から豊穎への連続性も見られ、先述の旧派歌人に対する新派の「攻撃」についても、国学者の歌論・言説に基づいて論じられたものだったのである。

第七章は、高崎・豊穎に続く小出繁や阪正臣の略歴や歌論について論じている。明治三十三年まで論じる上で欠かすことの出来ない歌人であり、高崎の事歴からは垣間見ることの出来ない、御歌所歌人の活動を紐解く上で重要な人物であることは云うまでもない。

第八章は、高崎の晩年をかけての活動といえる「彰善会」と「一徳会」の活動について触れている。高崎の初期の活動の原点と言える教育を具現化すべく「彰善会」を設立したのだが、高崎が「散々失敗」と述懐したように、種々の困難に直面し、明倫社と協同で組織した「一徳会」であるが、端的に言えば、国民道徳普及の先駆けともいえる活動であり、今後国民道徳論を語る上での源流とも成るべき活動であるだけに大変示唆深い論考であるといえよう。著者の今後の研究の視点としては、著作中にて論じられているが、やはり明治三十三年以降の御歌所の動向と、関連する国学者と新派歌人との往来が目下の研究課題となる。著者が指摘しているように、新派へ力点を置いた論考は数多くあるが、旧派から当時の斯界を俯瞰する試みは著者を先陣として近代研究者が取り組まねばならない課題であることを本書を評する上で再確認した。

そして、明治天皇の御配慮といえる詠進制度の更なる解明が望まれる。現在まで連続として続く詠進制度の連続性

を著者が解明できれば、制度史として更なる論の醸成につながると思われる。

以上、著者の幅広い知識とはほど遠い評者が雑駁に論じてしまったことは汗顔の至りである。著者並びに読者の方々においてはご寛恕を願う次第である。

(弘文堂、平成二十二年十二月、A5判、三三八頁、五二〇〇円)

(國學院大學伝統文化リサーチセンター資料館 嘱託学芸員)